

特別支援学校におけるスケジュールの 提示が自閉症児の行動に及ぼす効果

学校心理学専攻
臨床心理学コース
M08079A
辻 淳

1. 問題と目的

「見通しがもてないこと」は、自閉症の子どもにとっては大きな不安を、とりまく人間にとってはいわゆる問題行動を引き起こす（早川 2004）。よって自閉症の子どもには、時間の経過を視覚的に提示する構造化、すなわちスケジュール（予定）を提示することで、落ち着いて活動ができる援助をすることが大切である。

ところで、自閉症の子どもたちの発達の偏りは個人差が大きく、認知能力に開きがある。そのため、スケジュール表をより機能的に使用するためには、対象者に適したスケジュール表を検討していくことが必要である（霜田 2006）。

特殊教育から特別支援教育へ移行した平成 19 年以後、特別支援学校では児童・生徒数が急増している。勤務校でもこの傾向は顕著で、特に高等部では太田ステージにおいて Stage IV 以上の生徒が増えた。児童・生徒増に伴い経験の少ないスタッフが増加したことも重なり、言葉による一斉指導が目立つようになった。一方で、こういった指導が苦手な Stage III・2 までの生徒の存在があり、適切な支援を見直すことが重要となっている。

そこで、実際にどのような事例でスケジュール表が使われているか、そこで用いられているスケジュール表の構造はどのようなものかを調査する（研究 1）。次に日常生活の中での行動形成を目指した取り組み（研究 2）を行う。続いて見通しの持ちにくい場面での取り組み（予備研究、研究 3）を行う。

2. 研究 1

<目的>

現在どのようなスケジュール表が使われているかを確認する。

スケジュール表の構造を分析する。

<方法>

抽出した生徒について、認知能力、使用による変化などを担任から聞き取る。また、スケジュール表の視覚情報、提示する時間の範囲などについて分析した。

<調査期間>

2009 年 2 月～3 月

<結果>

10 例について分析。太田ステージはⅡ～Ⅳ・1。ステージⅡの生徒（2 名）は主に直後の行動予告のために使用。Ⅲ・1 の生徒（4 名）は主に順序があることを伝えるために使用。Ⅲ・2（3 名）、Ⅳ・1（1 名）は大まかな流れは分かっているが、変更の受け入れ、確認などのために使用。

認知発達が StageⅢ・1 からⅢ・2 に向上するのに伴い、眼前の具体物へのこだわりから日課やスケジュール的なこだわりへと変化していった事例（太田 2004）からもこれらのステージでのスケジュール表の活用法が適当であると考えられる。

3. 研究 2

<目的>

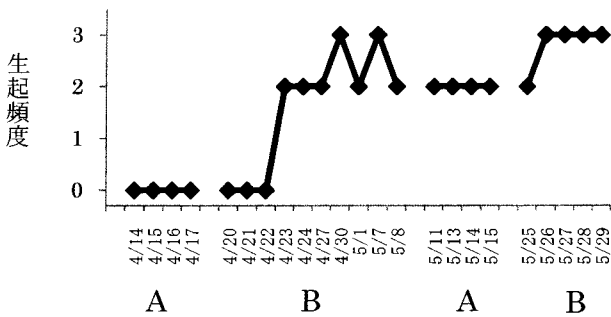
スケジュール表を提示することにより、登校時の教室での行動が他者からのプロンプトなしに行われるようにする。

<方法>

抽出生 S2（高等部 1 年、StageⅡ）に文字によ

り行動を示したスケジュール表を提示。実験デザインはABABデザインとし、ビデオで観察した。
 <経過> (2009年)

- A (4月14日～17日) 未介入 (ベースライン)
- B (4月20日～5月8日) スケジュール表使用
- A (5月11日～15日) スケジュール表なし
- B (5月25日～29日) スケジュール表使用



<結果>

表より、スケジュール表の有効性が確かめられた。S2は体験入学時に、不適応を予想されたが、朝の行動は自発で行うことが定着した。

4. 予備研究

<目的>

見通しの持ちにくい場面での問題行動とそれに対する対処について調べる。

<方法>

課題別学習 (毎週火曜日校外での活動が中心)のグループで教師に対して調査用紙により調査。

<調査期間>

2009年 9/8～12/22

<結果>

ロープウェー(9/8)、船 (10/20)、動物園(11/24)で活動した回には気になる行動が多く見られた。

9/8の活動で不安を感じていると思われた生徒(8名中6名)の原因としては、未経験、何が起こるか分からないことに対する不安があげられた。対処としては、事前に示す。声をかける。手をかす。等があげられた。

不安がみられなかったという答えの教師から、「口頭指示だけでなんとか動けそう」という回答。教師側に、「なんとか説得」しよう「言い聞かせよう」という意図が見られる。

11月以後は気になる行動がほとんど報告されなかった。行き先をわかりやすく伝えなくても気になる行動が少なくなった理由としては、このグループは、マンツーマンに近い状態であったので、不安を対人関係で対処したと考える。

また、自閉症の7名中4名がお気に入りのグッズを使用していることがわかった。これは、見通しの悪さから来る不安から気を紛らわせているのではないかと考えた。

5. 研究3 (2010年)

<目的>

Stage II～III-2までの生徒に対して、見通しの持ちにくい場面で、写真カードを提示して次の活動を予告することの有効性を検証する。

<方法>

1学期3回の活動で問題行動を示した生徒についてABC分析を行う。14名の中から5名の生徒を抽出し、観察する行動を決めた。

A: ことばによる予告

B: 写真カードとことばにより直後とその次の行動を予告

教師に対して文書により趣旨を説明し、写真カードの提示方法の統一を図る(現在の活動と次の活動を写真カードで示すことを確認)。

観察された行動をABC分析し、見通しの悪さが原因と思われるものをカウントした。

<調査期間>

事前調査は2010年5月11日、6月8日、22日。本調査は2010年9月14日、21日、9月28日、10月5日。

<結果>

全員にとって初めての場所(10/5)、複数の活動があった回(9/21)でも写真による活動の提示があると、見通しの悪さが原因と思われる行動が少なかったことから、見通しがもちにくい場面でスケジュールを提示すると、不安を抑制することができるといえる。

主任指導教員 有園博子
 指導教員 嶋崎まゆみ